

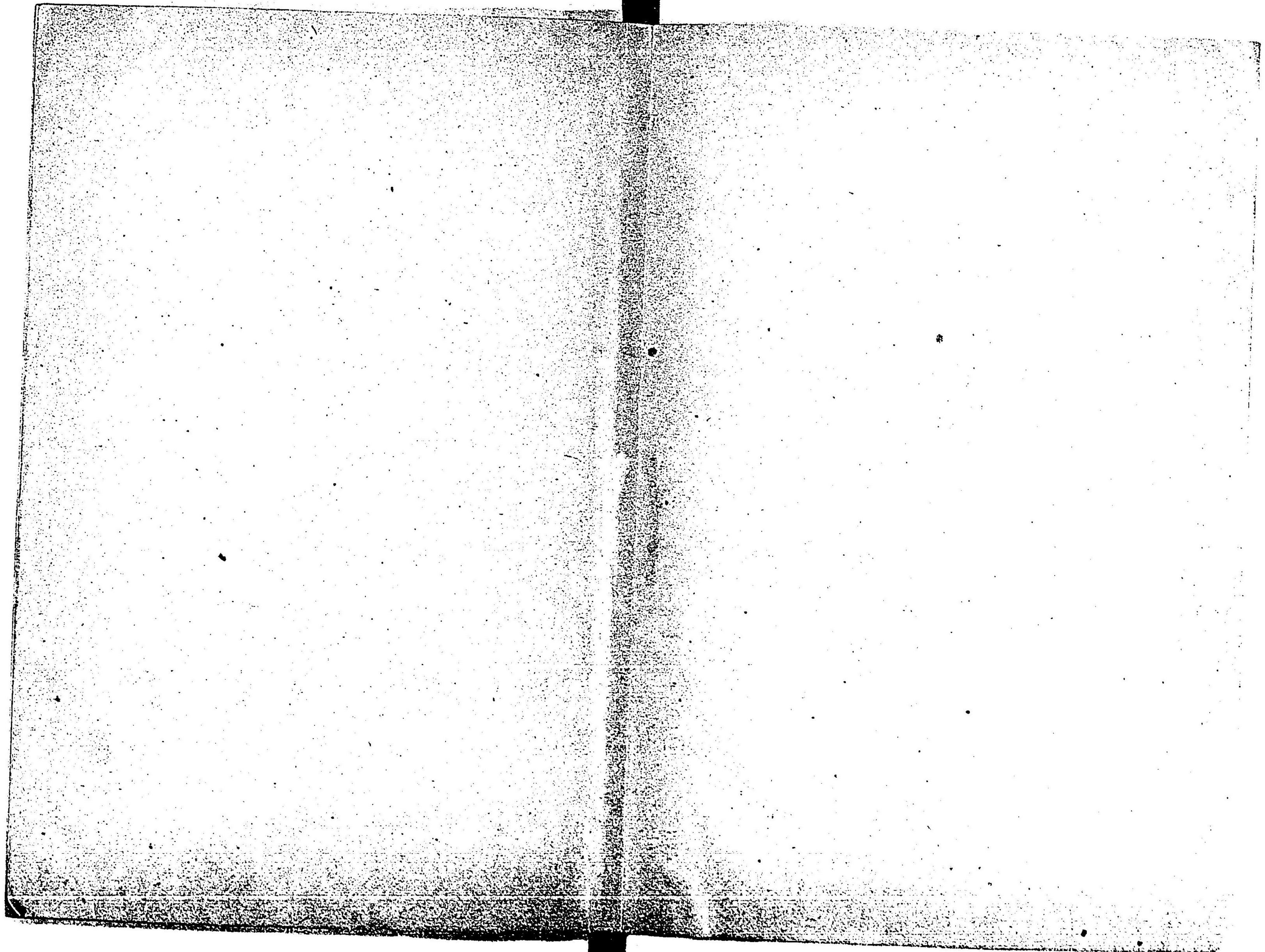
土佐日記新釋

259

544

替

1



特22
183

早稻田大學文學士
田山停雲著



田山停雲
日記新釋

明治
42 9 1
丙亥

東京
大阪

井上一書堂發行

序

古來土佐日記の註釋書の刊行せられたるもの、其數甚だ多し
と雖、岸本由豆流が考證、富士谷師杖が燈、香川景樹が創見
は土佐日記研究者のオーソリテイなり。されど考證は綿密
を旨とするものから、穿鑿の弊に陥り、燈は精細を主として
煩瑣となり、創見は新見創説の見るべきものなきにあらざれ
ど、牽強附會の説も亦少なからず。其他季吟が抄、守部が船
の直路の如きに至つては唯専門家が參考資料たるに過ぎず。
殊に近年刊行せられたる幾多の註釋書は皆此等より生れたる
ものにして見るべきもの少なし。然れども此等の註釋書より
生れたるが故に見るべきもの少きにあらざるは固よりにして

要は唯彼の長をとり此短を捨て、能く其批判に誤らなき註釋書を作り出すにあるや勿論なり。鬼才田山君といへども、三大註釋書の恩恵を無にして、土佐日記の研究は之をなすを得ざるべく、唯君の學と才とを以て、彼等の長所美点を集め、渾然たる美玉をなし、煩瑣穿鑿に苦しめられ、牽強附會の説に惱まざる、讀者の爲めに、直に精髓を讀ましめんとするにあるべく而して其計畫を遺憾なく實行したるもの、この土佐日記新釋なり。

峽 溪 水

土佐日記新釋緒論

田山停雲稿

第一 紀貫之の傳

紀貫之が傳記は明かならず。在來の諸説を綜合して考ゆるに、概ね下の如し。貫之は元慶六年（紀元一五四三年）に生る。父は歌人として名高き望行（又は望之ともいふ）の子にして長谷雄の孫なり。延喜年中御書所預となり、其後諸官を歴任して、延長八年土佐守となり、承平四年任期满ちて歸京、天慶年中立蕃頭となり木工權頭に轉じ、從四位下に叙せられしが、同九年死

せり、年六十五なりと、されど此説根拠を有さず古今集正義には、貫之が古今集を撰へるは四十三四歳、死せるは八十五歳位とせり。其理由として、古今集撰述を貫之が二十三歳又は三十二歳の時なりといふ一説を眞とせば、寛平后宮歌合の時僅かに八九歳なるべし。斯る幼童が歌人に加はるべき筈なしと、此の説眞に近し。とにかく貫之の死せるは七八十歳の時なりしなり

第二、歌人としての貫之

貫之は人丸、定家と共に日本三大歌人と稱せらる。其の歌道に大功ありしことは、今更記述するの要なし。又其功績は主として古今集の撰集にある事も人の既に

熟知するところ也。此の古今集の外、後撰和歌集あり醍醐天皇の命により、古今集中の佳作を撰擇したるもの也。貫之が歌は、古今集に百首、其他後撰及貫之家集にのせたるもの數百首あり。

貫之が歌の特色は、躬恒と同じく實情を寫せる事、熱情に富むことなり。然して躬恒に勝さるところは、想像の豊富なる点なり。されど何れかと言へば、想像を主とせるより實情の寫生を爲せるものに佳作多きやうなり。故に貫之の歌は、自然及人事の實狀實景を詠ぜるものに、其特色を發見すべし。貫之は常に理性により、躬恒は直覺による。故に貫之は理屈に陷るの弊あり

りて、彼の北窓瑣談の著者が「貫之は昔も今も人丸赤人につぎて和歌の聖ともてはやせごも、後世理屈歌の鼻祖ともいふべき歌多し」といへるを可とすべきなり

第三、散文家としての貫之

貫之が歌壇上の功績元より大なりといへごも、國文學史上、平安朝を、代表する大文學者たるの價值は、和歌よりも寧ろ散文にあり。

貫之が散文の著作は、古今和歌集序、大堰川行幸和歌序、土佐日記等なり。前二者は歌序にして、共に漢文に倣ひて作れるものなり。「由來外邦の文學を翻案するもの、其文學多くは生硬未熟にして蠟を嚙むが如きに

これには毫も其弊なく、語を疊み句を對して駢麗の體に擬し、文脈句法よく漢文の粹を得て、しかも國文の尺度を出でず。換骨奪胎宜しきに合ひて艶冶流麗、櫻の美と菊の清さを兼ねたるが如し。貫之の功は、漢文の法を國文に移して、彼此の融化を試み、無瑕の美玉毫も斧鑿の痕を止めざるにあり。而して其漢和融和は貫之の文、實に其嚆矢たる事、更めて記しおかざるべからず。寒中の白玉一輪は、枝に亂れし二月の紅梅より價あり。物のはじめたることの、いかに貴くしてまた困難なるよ。わづかに二篇の小品と慢るなかれ。貫之が汗と血とはこのうちにあり、國史を見よ。万葉集

の小序を見よ。懷風藻以下の詩集の序が何の體なるかを見よ。古今集の序を撰するや、一時のすさみにあらず。堂々として一代の名歌の上に冠らしめて、天下後世の範たるべし。しかも此體の先例は漢文に於て見るのみにして、いまだ國文にこれを見ず、尋常の文人は必ずや慣習の力に制せられて、卓抜の見なく、一通りの漢文を以て自ら誇り人に驕りしならん。さるを奮つて従來の情力を一撃して、革新の旗を翻へしる貫之の功は偉大ならずや云々」と、藤岡博士が激賞せられし如く、此二歌序は一種の文體を創始せるものにして、之より後の歌序は、皆此二文を摸せるものなり。

土佐日記に至りては、貫之が晩年の作にかゝり、純粹なる國文の典型たり。永井先生が「筆に隨ふて言湧き意に隨ふて句を成すところ、諧謔又わざとならず面白し。殊に諧謔の内又折にふれて悲哀の情をかすめ行くなご微妙也。これ當時作られたる作文の最上なるものにして、後世紀行文の摸範也」と評せられたる、至言といふべし。

第四、土佐日記の批評

吾人が覺束なき批評を述ぶるに先ち、諸先輩の説を紹介すべし。武島文學士が其著日本文學史に於て、土佐日記の特質をあげて、第一、言語平明に造句短く甚だ

意味の明白を得たること。第二、對照の方法を用ゐてかつは文章に變化をあたへかつは可笑の快樂を惹起せしめたること等なりといひ、「されど貫之の眞意はこれら洒脫なる滑稽なる筆づかひの間に實はその亡兒に對する悲哀の感情をもらすにあり。かれは笑はんが爲めに、土佐日記をかけるにあらずして、泣かんがためにしるせる也」と論結せり。

土佐日記が世人に推重さるゝに至りしは極く近世の事に屬す。古くは唯歌序のみを尊びたるもの也。故に二者の比較優劣論は屢學者にくりかへさるゝところ也。藤岡博士曰、「古今集序と土佐日記とを並べ見よ。序は

文に抑揚頓挫あり、秩序整然、名將が三軍を率ひて行進するが如くなれども、華美に過ぎ、語句の雕琢を主として、情熱に闕くるところあるが如し。これを措いて日記に向へば、鰻鱺の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいふべからざる興趣のその中に存するを見る。これ乃ち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を歎稱する所以なり。然ごも理路の整頓を喜び、行文の莊嚴を尙ぶ勅撰集の序と、一時の興に乗じて、情感の動くに任する日記の文とを、同じ尺度を以て測らんとするは、測る者の過にあらずや。……………風姿全く相異なる二

文を比較せんよりは、土佐日記と相類似せる伊勢物語と比較するを恰當なりとなし、一々例をあげて後、論断して曰、物語の文、簡短にして精趣纏綿、日記の長々しくかい列ねあはれなるが如くにして、あはれならず、をかしきが如くにしてをかしからざるご同日の談にあらず。又世人多く日記の滑稽を賞すれご、其實は記するごころ徒らに言語の上の諧謔にして、高尚なるをかしみは求むれごも得べからず。素樸なりごいひ、輕妙なりごいへご、情熱の熾なるものなく、行筆の重くろしきを強ひて軽くせんごして、口網も諸持に荷ひ出し、うなり出せる感なきにあらず。斯く論じゆく

ば、二篇の序文は、始めて漢和の體裁を融和せる歴史的功績甚だ大なりごいへごも、その文學的眞價に於ては、未だ許すべからざるものあり。土佐日記の文、簡効なりご賞美せらるれごも、これを伊勢物語なごに比するに、またその敵にあらず云々。」

佐々木信綱の説は、古來の諸註を總括せるものにして便利なるなるものなり。「この日記、貫之のみづから記されたるなるを、女のかけるやうにかきなされたるははじめて見る人の、心疑ひ思ふ所なるべし。又こはいたづらに見過すべき事にあらず。すべてこの日記を見んには、紀氏みづからを、女に託してかけりごいふ事

は、つかのまも忘るべからず。さて何故にしか女に託して物せられたるかといふに、もこの日記は、京に歸りのぼらんさせられし折しも、いたくかなしきものにせられし女子を失ひ、其なげきにたへかねて、ひそかに思をやらん爲に、かきいでられしなりけり。もし貫之みづからの記行させば、さるめしき悲哀の情をこゝかしこにかき出ん事、かなふまじければなり。この日記に、をかしき詞、されたる事の多くいでたるもまたその故なり。心ならぬをかしき詞、されたる事の多くいでたるも、またその故なり。心ならぬをかしき詞、されたる事の多くいでたるも、またその故なり。心ならぬをかしき詞、されたる事どもをいひ出て、みづがらの心をもな

こめ、妻君のなげきをもなくさめられしなり。殊にその任中に、海賊を追捕せられし事ありしかば、海賊の餘黨ども、かへさの船路に、其むくいせんご、貫之の船を追ひし事あり。又この頃は、航海たやすからずして、あまたの日數をつひやされし上に、常に風浪のさはり多く、堪へがたきなげきの上に、さる憂どもありしかば、それらを慰めんごて、滑稽をもいひ出られしなり。さるなげきの情、うれへの心、たはぶれの詞どもを、ありのまゝに書き出んごて、殊更に女に託して物せられしなり。創見に、この書のおほむね、亡兒のかなしみを主とし、下に海賊のおそりをふみ、これを

かすむるに、全文俳諧をもてすごあるは、いごいはれたる説といふべし。この日記の、文章のすぐれたる事思ふまゝをよみいでられし歌のこよなき事は、今更にいひいづべきにあらねど、道すがらありし事ごも、をかしき景色なごを、今も目の前に見るが如くうつし出され、又正史には載せられざる仲麿の故事をくわしく記され、又京に歸りて故郷の荒れたるさまをかき出て、人の心の變りやすきをかこたれ、又土佐より京に歸るには、さまで遠からぬ道を、十二月の廿一日に門出して、次の年の二月十六日に京につかれたるは、此頃の旅路の不便なりしも知られぬべし。國文の模範たるの

みならず、歴史をおぎなひ、當時の風俗人情、行路のありさまをもかき出られたる、たくひなき書といふべし。云々

第五、 註釋書解題

貫之が自筆の土佐日記は、蓮花王院の藏書中にありて文曆二年五月十三日藤原定家の書寫せし由なるも、其の本今は傳はらず。定家の本は、連歌師立的に傳はり後加賀侯の所藏となり、更に八條殿に參らせたりといふ。又妙壽院本には、明應元年仲秋藤原惺窩が貫之の自筆本より書寫せし由奥書せり。扱註釋書は古來甚だ多し。其中にて最も正確なるは左

の三書なりとす。

土佐日記考証	文政二年版	二卷	岸田由豆流
増補土佐日記考証	明治三十一年九月版	一卷	鈴木弘恭
土佐日記燈	寫本二十四册、明治三十一年十月國光社出版三册本アリ		富士谷御杖
土佐日記創見	文政六年刊行四册、明治二十四年國書出版會社ヨリ一册本トシテ出版サル		香川景樹

此の外出版されたるもの甚だ多し。重なるものを擧ぐれば左の如し。

土佐日記聞書	寫本	二卷	著者不明
土佐日記見聞抄	寫本	一卷	小野山隱士
土佐日記附註	刊 万治四年本	三卷	人見ト幽
土佐日記抄	刊 寛文元年刊	二卷	北村季吟

土佐日記首書	刊 文四年五月刊	二卷	著者不明
土佐日記寫本	寫 昭和五年本	一卷	加藤宇方伎
土佐日記打聞	寫本	二卷	楫取魚彦
船の直路	刊本	二卷	橘守部
土佐日記俚言解	刊本	一卷	佐々木弘綱
土佐日記註釋	刊本	一卷	富田銀一郎
土佐日記讀本	刊本	一卷	鈴木弘恭
土佐日記	刊本	一卷	増田千信
土佐日記講義	刊本	一卷	三木五百枝
同 名	刊本	一卷	今泉定介
纂註土佐日記	刊本	一卷	齋藤普春

土佐日記講義

刊本 一卷

小田清雄

校註土佐日記

刊本 一卷

佐々木信綱

土佐日記講義

刊本 一卷

石田道三郎

標註土佐日記

刊本 一卷

小田清雄

土佐日記讀本

刊本 一卷

井上喜文

土佐日記講義

刊本 一卷

猪熊淺麻呂

土佐日記地理辨

文久二年 一卷

鹿持雅澄

土佐日記地理辨追考

一卷

松本弘蔭

土佐日記地理考

明治二十五年刊本 一卷

福島成行

以上は何れも大同小異なり。何れも著しく悪しきものなく善きものなし。詳しくは永井先生の國文學書史を参考すべし。

土佐日記新釋

田山停雲著

(第一日)

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の十二月の二十日あまり一日の、いぬの時に門出す。そのよしいさゝか物に書きつく。ある人、あがたの四年五年はてゝ、れいの事ども皆しをへて、解由なごりて、住む館よりいでゝ、舟に乗

るべき所へわたる。かれこれしるしらずおくりす。年頃よくぐしつる人々なん、別れがたく思ひて、其日しきりに、とかくしつゝの、しるうちに、夜ふけぬ。

新釋。男もすなる日記とは、當時の風習として、男の日記は皆漢文にて書けるものなり、たこへは篋日記、平仲日記の如し。然るに貫之は此の型を破りて國文を以て書けり。故に冒頭に於てその由を述ぶる也。此の日記は貫之が女となりて書けるもの故、讀む人もその心して讀まざれば不可なり。又日記とは日々の出來事を記すもの、旅日記、家庭日記等あり。その年の承平四年也。貫之延

長八年土佐の守となり。承平四年の冬任果て、京に歸る。二十日あまり一日とは二十一日なり。戌の時、こは今日の午後八時也。初更に出發せることになれど、此の戌の時こは去ぬの時こかけて言へる戯れにて實際午後八時に出發せるにあらざるべし。そのよし云々歸路船中の有様を之れより書かんとするなり。物こは懷紙などをさすなるべし。ある人こは貫之自らをさす。あがたこは國司の任國をさしていふ。此所にては土佐國なり。田舎こいふ意にあらず。四年五年とは國司の任期は四年也。故に足掛五年となる。日本紀略に、弘仁六年

七月、諸國司遷替以四年爲限と見えたり。れいの事は國司の常務也。後任者に國務を引渡すなり解由とはとくるよしとも讀む。一切の公物算勘を引渡して受取る證文也。續日本記卷十一云、天平五年四月辛丑制諸國司等相代向京、或替人未到以前上道或雖交替訖不付解由、因茲去天平三年告知朝集使等已訖。舟に乗るべき所とは牛老川の邊をさす。國司の館は長岡郡にありき。かれこれ云々誰も彼も知るも知らぬも送り來れり。年頃よくいづる云々日頃召使へる家來共は別けて名殘を惜しみ、色々ご手助けして働く。がやく騒しくし

てゐるうちに夜もふけたり。

(第二日)

二十二日、和泉の國まで、たひらかにさねがひたつ。藤原言實、舟路なれど、馬のはなむけす。かみなかしも酔ひすぎて、いとあやしく、しほ海のほとりにて、あざれあへり。

新釋。和泉の國まで云々、都まで無事ならんことを祈るは勿論なれど、まづ都に近き和泉迄海上無事ならんことを祈るなり。藤原言實とは何人なりや傳記不明。多分土佐の人にて國司の屬官なるべし馬のはなむけとは旅立つ人の馬の鼻を旅先へ向け

て無事に歸れと祈ること也。後には酒宴を開きて物なごを贈れり。こゝにては船へ乗るなれば馬はあざれども戯れて言へるなり。かみなかしもこは貴賤上下也。いほのほとりに云々、あざれこは物の腐ることをいひ、又人々の戯談に笑ひ崩れるをもいふ。即ち塩は物を腐らしめぬものなるに、人々は皆海海の邊にて戯れあざれあつてゐるこいふ滑稽なり。

(第三日)

二十三日、八木の康教こいふ人あり。この人、國にかならずしもいひつかふ者にもあらず。これぞたゞしき

やうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらん。國人の心の常として、今はこ見えざるを、心あるものは、はぢずきなんきける。これはものによりて、ほむるにしもあらず。

新釋、八木の康教は異本山の康教に作る。其傳記明かならず。國にかならずしも云々康教は常に國司の廳に出仕せる人にあらず。身分ある人なりし故時々來りしまで也。たゞしきやう云々こは此人はあざれるやうな事なく、儀式整然と餞別を爲したり。守がらにやあらん云々貫之謙遜して國守の悪かりし故にやあらん。今任期果て、京に上る時、

すべての人には薄情なれば、餞別にも来るまじきに、義理堅き國人は来るこなり。これはものによりて云々斯く康教を褒むるは、餞別の贈物のよき故にあらず、全く康教の人物のエラキをいふなり。之れ又戲言なり。

(第四日)

二十四日、講師、馬のはなむけしに出でませり。ありさある上下童まで、酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞあそぶ。

新釋、講師とは諸國に國分寺あり、其住職を講師といふ。其の國の僧尼の司なり。講師が自身餞別に

來れるなり。一文字云々之れ亦戲言也。貴賤の別なく皆酔ひて、一字の文字さへ知らぬものが、十文字を踏みて歩くこなり。ものしは助字にて其物を強く指す也。らの誤記といふ説當らず。

(第五日)

二十五日、守のたちより、よびにふみもて來れり。よばれて至りて、日ひこ日、夜ひこ夜、こかくあそぶやうにて明にけり。

新釋。守の館云々新任の土佐守が貫之を招きて送別の宴を催せるなり。其招待に應じて行き、終日終夜、遊樂を爲して夜をあかせりといふ。

(第六日)

二十六日、猶守の館にて、あるじしののしりて、をのこあまたにものかづけたり。からうた聲あげていひけり。やまご歌、あるじもまらうごも、こご人もいひあへりけり。からうたこれにはかゝらず、やまご歌、あるじの守のよめりける。

都いで、君に逢むこし物を

こしかひもなく別れぬるかな

こなんありければ、かへる前の守のよめる。

白夢の浪路を遠くゆきかひて

われに似べきは誰ならなくに

こご人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。こかくいひて、前の守も今のも、もろごもにおりて、今のあるじも、前のも、手ごりかはして、酔ごごに、心よげなることして、出でにけり。

新釋、猶守の館にて云々、二十六日も守の館にありて饗應を受く。新任の土佐守は貫之の家來共に迄色々なる饞別を與へたり。異本にをのこらまでに物かづけたりあり。からうたこは唐歌にて詩也やまご歌こは和歌なり。あるじは新任の土佐守。まらうごは貫之、こご人は隨伴の人を指す。都いで、云々の歌の大意は、私は山城の都よりはるば

る君に逢はんと来てみれば、その甲斐もなく君は都へ歸るごと別れねばならぬ、と別れを惜しむ意也。此の歌に答へて貫之のよめる歌は、海上風波の怖ろしき間を往來するものはあるまいと思へるに吾に、似て、君もつらき海上を往來し給へりご其勞をいふ也。こご人云々他に歌よめるもありしが、佳作はなかりしごなり。酔こごに云々醉言しごろもごろなりしも互にあかぬ離別の情を述べつくし、互に前途を祝福して別れたり云々。

(第七日)

二十七日、大津より、浦戸をさしてごきいづ。かくあ

るうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄に失せしかば、此頃のいでたちいそぎを見れご、何事もえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、哀しみ戀ふる。ある人々ごもえたへず。このあひだに、ある人の書きていたせる歌。

都へご思ふももの悲しきは

かへらぬ人のあればなりけり

またあるごきは

あるものご忘れつゝ猶なき人を

いづらご問ぞ悲しかりける

ごいひけるあひだに、鹿兒の崎ごいふ所に、守のはら

から、又こそ人、かれこれ酒なども追ひ来て、磯に
おりあて、別れ難きことをいふ。守の館の人々の中に
この来る人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく。か
く別れがたくいひて、かの人々の、口網ももろもちに
て、この海べにて、になひ出せるうた。

をしと思ふ人や留ると葦鴨の

打むれてこそわれは來にけれ

こいひてありければ、いこいたくめで、行人のよめ
りける。

棹させこそこひ知られぬわたつみの

深き心を君にみるかな

こいふあひだに、梶取もののはれどしらで、おのれ
し酒をくらひつれば、早くいなんとて、潮みちぬ、風
もふきぬべしこそわげば、舟に乗りなんこそ。このを
りに、ある人々、折節につけて、から歌ごも、時に似
つかはしきをいふ。又ある人、西國なれど、甲斐歌な
ごいふ。かくうたふに、ふなやかたの塵もちり、空ゆ
く雲もただよひぬこそいふなる。こよひ浦戸にこまる
藤原の言實、橘の季衡、こそ人々おひ來たり。

新釋、二十一日に門出して二十七日迄同じ所に泊る
はあまり吞氣なるやうなれど、昔は旅は容易にあ
らず、まづ十分に旅装を整へて、人々に暇乞する

等中々面倒なりしなり。直路は人情の厚きこと思ふべしといへり。此頃のいでたち云々貫之が京より連れ來りし女兒死せるより、出發を急がねばならぬのであるが、何事も手につかぬ。ある人もえ堪へずとは傍に居る人々も同情の感にたへざる也。ある人は貫之自身をさす。都へ云々の歌は宇治拾遺にも貫之が歌としてのせたり。其大意は斯る田舎より都へ歸るならば誰ぞ嬉しかるべきにさはなくて悲しみ戀ふるは愛兒を失ひたればなりとなり。貫之が女兒を失ひしはやがて彼が此の日記を書ける動機となりしなりといふ。輕々に

見のがすべからざる事件なり。あるものと云々の歌の大意は、失せにしことを忘れて女兒は何處ぞと問ふとなり。いつらとは何處ぞと尋ねる意。鹿兒の崎は大津とならびたる處にあり。守のはらからとは新任の土佐守の兄弟なり。守の館の人々云云新任の國司の屬官等の内にも斯く跡を追ひ來れる人々が殊に情深き人のやうに船中の人に思はれる也。いはれほのめくとは其様がうすく見ゆるこの意。かの人々は鹿兒の崎まで來れる人々をさす。口網ももちにて云々とは歌をよむに口重きを網にたこへたる戲言にして、口網とは漁士

の用ゆる大綱なりといふ。もろもちとは諸共に持
つことなり。をしと思ふ云々歌の大意はをしは惜
しと駕こにかけ、大勢打つれて見送りに來れりこ
いふなり。棹させご云々の歌の大意は、棹させご
も底の知れぬ深き海の如き志を君等に認め感謝す
ることなり。上句は全く深きの序歌なり。李白が注
倫に與へたる詩に、桃花潭水深千尺、不及汪倫送
我情。とあるに似たり。おのれしのしは助辞にて
語勢を強むる也。自分ばかりの意。甲斐歌とは古
今集に「甲斐が嶺をねこし山こしふく風を人にも
がもやこつてやらん」とあり。又「甲斐が嶺を

すやにも見しがけられなくよこほりふせるさやの
中山」ともあり。此二つの内を歌へるなるべし。
西國なれども云々甲斐は東國なれども西國にて歌
ふことなり。かくうたふに云々其吟聲々の美しきを
いふ。莊子に虞公善歌、能令梁上塵起とあり、又
列子に奏青之聲、振林木、響過行雨とあるを、海
路なれば舟にたこへて言へるなり。橘の季衡の傳
記未詳。浦戸とは吾川郡にある崎なり。

(第八日)

二十八日、浦戸よりこぎ出て、大湊をおふ。このあひ
だに、はやくの守の子、山口の千岑、酒よきものごも

もてきて、舟にいれたり。ゆく／＼飲みくふ。

新釋、大湊は長岡郡と香美郡との間の港なり。おふは舟を風に追はする也。はやくの守は貫之より以前の國司をさす。山口の千岑は誰なるや不明

(第九日)

二十九日、大湊にとまれり。くすしふりはへて、屠蘇白散酒くはへてもてきたり。心ざしあるに似たり。

新釋、承平四年十二月は小の月なれば、今日が大晦日なり。故に元旦の用意に屠蘇白散など持來れるなり。醫師は土佐の國醫なり。ふりはへては態々なり。古今集貫之が歌に、「春日野のわかかなつ

みにやしるたへのそでふりはへて人のゆくらん」
ごあり。心ざしあるに似たり。酒を加へて持ち來れるをほめていへるなり。

(第十日)

元日、なほ同じ泊なり。白散を、ある者夜の間とて、舟やかたにさしはさめりければ、風にふきながさせて海に入れて、え飲まずなりぬ。芋もあらめも齒がためもなし。かうやうの物なき國なり。求めもおかず。たゝ押鮎の口をのみぞすふ。この吸ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらんや。今日は京にのみぞ思ひやらるゝ。九重のかごのしりくめ繩の、なよしの頭、ひゝら

木ら、いかにございひあへる。

新釋、承平五年正月元旦也。風にふきながさせて云々異本にならさせて云々に作る。共に舟屋形の上に置ける故風に吹き落され海に流してしまひ飲まざりしとなり。辛、あらめ共に元旦用ゆるもの、はがためこは元旦固き物を食へ齡をかためる祝儀とするなり。國こは舟のこを戯れて言へるなり求めもおかずとは今迄に買つておかざりし故残念なりといふ也。押鮎の云々鮎は土佐の名産也。之れを乾したるを携へて居たるが固くて食へるこも出来ぬ故互になめ合ふ也。押鮎もし云々鮎もし

心あらば何と思ふなるべき。今日は京にのみぞ云々都の有様を想像する也。しめくめ繩こは注連繩なり。なよしは縮なり。ひいらぎとは移なり。以上皆正月の祝物也。

(第十一日)

二日、なほ大湊に泊れり。講師、もの酒おこせたり。新釋。講師こは前に來た人、もの酒こは酒や肴のことなり。

(第十二日)

三日、同じ所なり。もし風波の、しばしと惜む心やあらん。こゝろもこなし。

新釋。もし風波の云々毎日風や波のあしくて出船の
出来ざるは或は非情の草木までが別を惜しみて出
すまいとするならんごなり。例の戲言也。

(第十三日)

四日、風ふけば、え出でたはず。まさつら、酒よき物
たいまつれり。このかうやうの物もてくる人々、なほ
しもえあらで、いさゝけわざせさす物もなし。賑は、
しきやうなれご、まくる心地す。

新釋、昌連酒肴を貫之に奉る。之れ本書の著者は女
なる故貫之に對して敬語を用ゐて書ける也、なほ
いもえあらで云々斯く厚意を受けても夫れに對し

て返禮すべき物なし。賑はいき云々見舞の人々た
えざる故賑かなれごも一々返禮が出来ぬ故、心に
不満足を感じごなり。

(第十四日)

五日、風浪やまねば、なほ同しごころにあり。人々た
えずごぶらひにく。

新釋。たえずごぶらひにくとは見舞の客絶えず來る
ごなり。

(第十五日)

六日、きのふの如し。

(第十六日)

七日になりぬ。おなじ湊にあり。今日は、あを馬を思へごかひなし。ただ波の白きぞ見ゆる。かゝるあひだに、人の家の、いけご名ある所あり。鯉はなくて、鮒より始めて、川のも、海のも、ここものも、長櫃になみつづけておこせたり。若菜籠にいれて、雉なご花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌。

浅茅生の野へしにあれば水もなき

池に摘つる若菜なりけり

いごをかし。かしこのいけといふは、所の名なり。よき人の、男につきて下りて、住みけるなり。この長櫃

の物は、みな人童までにくれたれば、飽きみちて、舟子ごもは、はらつづみをうちて、海をさへ愕かして、波たてつべし。かくてこのあひだに、事多かり。今わりごもたせて來たる人、その名なごぞや。いま思ひいでむ。この人、歌よまんご思ふ心ありてなりけり。ごかくいゝひて、浪の立つなる事ご、うれへいひてよめる歌。

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも

後れてなかん我やまさらむ

ごぞよめる。いご大ごゑなるべし。もてくる物よりは歌はいかゝあらん。この歌を、これかれあはれがれご

も、ひごりもかへしせず。しつべき人もまじはれ、この歌をのみいたがり、物をのみ喰ひて、夜ふけぬ。この歌ぬし、またまからずさいひてたちぬ。ある人の子の童なる、ひそかにいふ。まる此歌のかへしせんといふ。驚きていこをかしき事かな。よみてんやは、よみつゝくは、はやいへかやといふ。まからずこて立ぬる人を、まちてよまんとてもごめけるを、夜ふけぬごにやありけむ。やがていにけり。そもくいかよみたりご、いぶかしがりてごふ。この童、さすがに耻ぢていはず。しひてごへば、いへる歌。

ゆく人もごまるも袖の涙川

みぎはのみこそぬれまさりけれ
 ごなん、よめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いご思はずなり。わらはごこにては、何かはせん、おんなおきなをしつべし。あしくもあれいかにもあれ、たよりあらばやらんごて、おかれぬめり。

新釋。あを馬は白馬の節會のこごにて、正月七日天皇豊樂殿にて馬を見るの儀式あり。此一段の大意は毎年今日は首馬を見たるものなれごも、今年は田舎に居るごご故見るごごを得ず、唯浪の白きを見るのみ。人の家のいけご云々はいけごいふ地

の人の家より也。鯉はなくて鮒より始めて云々鯉は川魚の玉なるが、此所には鯉はなくて鮒より以下色々なものあり。若菜とは芹、薺、御行、はこべ、佛坐、すゝな、すゝしろの七種なり。若菜籠の籠は昔は唯「こ」こいへり。今日は「かこ」なり。雉子なご云々花に鳥をつけて贈物とするは當時の風習也。花は梅花なるべし。若菜を知らせたるこは青馬の節會も見ざる故正月七日なることを知らざるが唯若菜を見て始めてそれこ心付くとなり。淺茅生の野云々歌の大意は池こは名ばかり水のない淺茅生なご雜草生ふる野邊で摘んだる若菜

故こても進上の出来ぬものなりこ謙遜して言へる也。よき人云々身分ある女が男こ共に都より此所に住めるが、さきの贈物は此の夫婦のせる事なりされば禮儀に叶ひたりこいふなり。此等は言外の意味にて面白し。其名なごぞやこは其人の名は誰なりしか今思ひいださんこなり。こかくいひくで云々其人歌をよまんこして其題を求め居たるが遂に浪のたつを見て一首を詠ず。しつべき人こは返歌を爲し得る人也。またまからずこは又參らんこす也。或はまだ退出せずこも解す。ある人の子の童こは貫之の女也。ゆく人も歌の大意は、行

者も送者も其悲は同じこと也。共に流す涙は流れて川水をまし遂に汀をぬらすなるべしといふ也。かくはいふものかのかは詠嘆の辭なり。うつくしければ云々吾兒を愛するの餘りか案外の上出来なり。おかれぬめりとは親の作として書きおげりとなり。

(第十七日)

八日、さはる事ありて、猶おなじ所なり。こよひの月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の、山のはにげていれずもあらなんといふ歌なんおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、波立さへていれずもあらなんとよ

みてましや。今この歌を思ひいで、ある人のよめりける。

てる月の流るゝ見れば天の川

いづるみなごは海にさりける。

新釋、さはる事ありてごは風波以外の故障起りてなり。海にぞ入るごは八日月なれご海邊の事ゆへ海中に沈み行く、そのけしきの面白さは業平の歌を思ひいださしむ。業平の歌ごは「あかなくにまだきも月のかくるゝか、山のはにげていれずもあらなん」ごあり。てる月の歌は貫之の作也。其大意は月も海中に入るを見れば天上の銀河も其源は皆

海なるべしといふ也。

(第十八日)

九日、つとめて大湊より、那波の泊をおはんさて、こ
ぎ出けり。これかれたがひに、國のさかひのうちはこ
て、見送りに来る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡
長谷部行政らなん、御館よりいでたまひし日より、こ
ゝかしこに追ひ来る。この人々ぞ。心ざしある人なり
ける。この人々の深さ心ざしは、この海にはおとらさ
るべし。これより今は漕ぎ離れて行く。これを見送ら
んさてぞ、この人ごもは追ひきける。かくてこぎゆく
まにまに、海のほとりに留まる人も遠くなりぬ。舟の

人も見えすなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思
ふ事あれごかひなし。かゝれごこの歌を、ひごりごと
にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れごも

ふみしなれば知すやありけん

かくて宇多の松原を行過ぐ。其松の數いくそばく。い
く千年経たりごしらず。もごごごに浪うちよせ、枝ご
ごに鶴飛びかふ。おもしろしご見るにたへずして、舟
人のよめる歌、

見渡せば松のうれ毎に住鶴は

千世のごちごを思ふへらなる

こや。この歌は、所を見るに、えまさらず。かくある
 を見つゝ漕ぎ行くまに、山も海もみな暮れ、夜ふ
 けて西東も見えずして、てけの事、梶取の心にまかせ
 つ。をのこもならはぬは、いごも心細し。まして女は
 船底にかしらをつきあて、ねをのみぞなく。かく思
 へば、舟子かぢごりは、ふなうたうたひて、何ごもお
 もへらず。そのうたふ歌。

春の野にてぞねをばなく、わかすゝきにて手を
 きるく、つんだる菜を、顔やまほるらん。し
 うとめやくふらん、かへらや。よんへのうなる
 もがな。錢こばん、よんへの菜を、そらごを

して、おぎのりわざをして、錢ももてこず、お
 のれだに來ず。

これなみに多かれごかず。これらを人の笑ふをき、
 て、海はあるれご、心はすこしなきぬ。かくゆきくら
 して、ごまりにいたりて、おきな人ひとりたうめある
 がなかに、心地あしみして、物もものし給はでひそま
 りぬ。

新釋、つごめては翌朝早く也。那波は奈半にて香美
 郡にあり。國の境は香美郡と長岡郡との境をい
 ふ。思ひやる云々歌の大意は、陸上の人々を思ふ
 、吾々の心は海を渡りて行けごも文をやるここが

出來ぬ故通ぜぬなるべしとなり。ふみは踏に通ずる也。舟人は貫之自らをさす。見渡せばの歌の大意は、松と其松の梢に住む鶴とは千代の友人であると思ふならんとなり。へらなるはべきなりと同じ。ところを見るに云々歌は元來實際より美しきものなれど、之れは實地の方がよしとなり。この事は古語のこいけの事の略即ち天氣具合なり。ねをのみぞなくとは聲をあげてなく也。おもへらずとは思ひ居らず也。春の野以下船歌の大意は、人は樂む春の野に出て、自分は聲をあげて泣く。薄等にて手足を痛めながら摘取つた菜を親が

貪食うか姑がたべるか。かへらやは相の手の調子なり。昨夜の童女が來をらずして詐言を以て欺き其菜を持つて行つてしまつた。さうして姿を見せぬ。心地あしみは心地あしき有様なり。物もものしは食物をたべざる也。

(第十九日)

十日、那波の泊にとまりぬ。

新釋、異本には「今日はこの那波の泊にとまりぬ」ごあり。これを是とせば、今日は天氣はよければ昨日の再酔にて一日滞留せる事になる。

(第二十日)

十一日、あかつきに舟を出して、室津をおふ。人皆まだ寝たれば、海のありさまも見えず。たゞ月を見てぞ西ひむがしをばしりける、かゝるあひだに、みな夜あけて、手あらひれいの事ごもして、ひるになりぬ。今し羽根こいふ所にきぬ。若き童、この所の名をきゝてはねこいふ所は、鳥の羽のやうにやあるこいふ。まだ幼き童のことなれば、人々わらふに、ありける女童なん、この歌をよめる。

まここに名にきく所はねならば

飛ぶが如くに都へもがな

こぞいへる。男も女も、いかでこく都へもがなと思ふ

心あれば、この歌よしこにはあらねど、げにこ思ひて人々わすれず。このはねこいふ所こ童のついでにぞまたむかしの人を思ひいで、いつれの時にか忘るゝ今日はまして、母のかなしむ事は、くだりし時の人の數ならねば、古き歌に、かずはたらでぞかへるべらなるこいふ事を思ひいで、人のよめる、世の中に思ひあれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかなこいひつゝなん。

新釋、室津とは安藝郡にあり。今心のしは助辭也。

まここに云々の歌の大意は、此の童の言ふ如く

眞の鳥の羽ならば飛ぶが如く都へかへりたいとなり。ごぞいへるの五文字は誤入なるべし、なきをよしとす。むかひの人とは死せる女兒のこゝ也。今日はまして云々貫之の土佐に下れるは六年以前即ち延長八年十一月の今日（十一日）なり。母親は殊に思ひ出せる也。古き歌云々古今集にあり、「北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて來し、數はたらでぞかへるべらなる」ごあり。

（第二十一日）

十二日、雨ふらず。文時、維茂が舟のおくれたりし、鳴し津より室につきぬ。

新釋、雨ふらずは朝來曇天なりしが雨は降らざりき。又左様なる天氣なりし故舟出せざりきごいふ意も含む、文時、維茂共に何人なるや不明也。鳴津は大湊のこゝなり。

（第二十二日）

十三日、曉にいさゝか雨ふる。しばしありてやみぬ。男女これかれゆあみなごせんとして、あたりのよろしき所におりてゆく。海を見やれば、雲も皆浪ごぞ見ゆる蟹もがな。いづれか海ご問ひて知るべく。ごなん歌よめる。さて十日あまりなれば、月おもしろ。

し。船にのりそめし日より、舟には、紅濃く、よき衣
きず。それは海の神にをぢてといひて、何のあしかげ
にこそづけて、ほやのつまの、いずしすしあはびをぞ
心にもあらぬ脛にあげて見せける。

新釋、ゆあみは入浴なり。雲も皆、云々歌の大意は夕
ぐれ四邊覺束なくなりて雨と浪との區別がつか
なくなつたから漁士でも來たら尋ねてみやうといふ
なり、紅濃くよき衣きずとは海神は物を欲がる神
なる故美衣はつけずとなり。何のあしかげ云々諸
説區々なれども何處とも指さずといふ意なりと創
見にみえたり。

(第二十三日)

十四日、あかつきより雨ふれば、おなじ所に泊れり。
舟君せちみす。さうじ物なければ、午の時より後に、
梶取のきのふつりたりし鯛に、錢なければ、米をこり
かけて、おちられぬ。かゝる事おゝくありぬ。かぢこ
り又鯛もて來たり。米酒しばぐくる。梶取けしきあ
しからず。

新釋、舟君せちみすは舟君は紀氏を自らさす也。

せちみは節忌にて此所にては六齋日をいふ。六齋
日は八日、十四日、十五日、二十三日、二十九
日、三十日也。公私殺生禁斷するなりさうじは精

進也。錢なければはは戯言なれども又當時金錢の流通不便なりしをも知るべき也。おちられぬは精進落にて精進すべきものなき故廢したる也。かいること多くありぬとは米を以て錢にかへたること多きをいふ。精進を廢したること多しといふにあらず。米酒しばしくは米や酒を鯛ごりかへてやりたる也。くるはくれる也。楫取けいきあしからずは楫取の機嫌よきをいふ。

(第二十四日)

十五日、けふあづきがゆ煮ず。くちをしく、猶日のあしければ、るざるほどにぞ、けふ三十日あまり經ぬる

いたつらに日を送れば、人々海をながめつゝぞある。女の童のいへる。

立てばたつゝれば又ある吹風と

浪とは思ふごちにや有らん

いふかひなきものいへるには、いごにつかはし。

新釋、今日あづきがゆ煮ずとは、正月十五日亥時、

煮小豆粥、爲天狗祭庭中案上、則其粥凝時向東方再拜長跪服之、終年無疫氣とありて、正月十五日は小豆粥を煮るべき日なれども、舟中の事故略したるなり。くちをしくの字は衍文ともいふ。或はくちおしく猶日のあしければと下につけて

もいふ。何れが可なるべきか。かざるほごは舟の進行の遅々たるをいふ。ゐざるは膝行也。立ては云々歌の大意は、風が吹けば浪起り、風静まれば浪も穩になるのは、風と浪とは兄弟同志ならん^{の意}。いふがひなき云々るに足らぬ小供の歌として、實際を穿てり。

(第二十五日)

十六日、風浪やまねば、猶おなじ所にこまり、たゞ海のみなん思ふ。風波ごにもやむべくもあらず。ある人の、この浪立つを見て、よめるうた、
霜だにもおかぬかたぞこいふなれご

波の中には雪ぞ降ける

さて舟に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりけり。

新釋、みさきこは室津より一里にて室戸崎又は東寺の崎といふ處也。霜だにも、の歌の大意は、霜も降らぬと聞いた南國なれごも、浪の中には眞白に雪がふつてゐるやうだこ、波を形容せる也。白氏文集に誰云南國無霜雪、盡在愁人異髮間とあり。之れより歌へるなるべし、今日までに云々と日數を數へるは舟中無聊に困しむさま見えて妙なり。

(第二十六日)

十七日、くもれる雲なくなりて、あかつき月夜いとおもしろければ、舟をいだしてすぎゆく。このあひだに雲の上も海の底も、おなじごとくになんありける。うへも昔のをのこは、棹は穿つ波のうへの月、船はおそふうみの中のそらをこはいひけん。きゝさしに聞けるなり。またある人のよめる。

みなそこの月のうへよりこぐ舟の

棹にさはるは桂なるらん

これをきゝて、ある人のまたよめる、

かげ見れば波のそこなる久方の

空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふあひだに、夜やうやく明け行くに、梶取ら、黒き雲にはかにいでぬ。風もふきぬべし、御船かへしてんといひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いこわびし。

新釋、昔のをのこは賈島をさす。其詩に棹底波底

月船壓水中天とあり。きゝさしは聞き覚えなり。

みなそこの云々歌の大意は、海底に映れる月の上

を漕ぎ行く舟の棹に當るのは海の藻草にあらずし

て、月中の桂なるべしといふ也。月中の桂とは西

陽雜俎に月中桂高五百丈、下有一人常斫之とあり

て古くより、詩歌に引用さる。棹にさわるは元より

海の藻草なり。それを月中の桂と美化せる也。かげみれば、云々の大意は、海底に映ぜる大空の影を見れば、海亦大空也。はてしなき大海をわたるを淋しと感ぜる也。

(第二十七日)

十八日、猶おなじ所にあり。海あらければ舟いださずこの泊、遠く見れども近く見れども、いとおもしろしかゝれども、くるしければ、何事もおぼえず。男ごちは心やりにやあらん、からうたなごいふべし。舟もいださで、いたづらなれば、ある人のよめる。

磯觸のよするいそには年月を

いつごもわからぬ雪のみぞ降る

この歌は、常せぬ人のことなり。また人のよめる、

風による波の磯にはうぐひすも

春もえ知らぬ花のみぞさぐ

この歌ごもを、すこしよろしと聞きて、舟のをさしけるおきな、月頃の苦しき心やりによめる、

立つ浪を雪か花かこふく風に

よせつゝ人をはかるべらなる

この歌ごもを、人のなにかごいふを、ある人のきゝふけりてよめる、その歌、よめる文字、三十もごあまり七もご、人皆えあらで笑ふやうなり、歌ぬし、いごけ

しきあしくてゑまず、まねゞごもえまねばず、書けり
ごもえ讀みあへ難かるべし。今日だにいひがたし。ま
して後にはいかならん。

新釋、ぐるいければ云々、長滞在の無聊に苦しむご
又舟酔にくるしむこの二つにて、何をする元氣な
しさいふ也。心やりにやあらんとは氣晴にやる也
磯觸云々の大意は岩にukだけてよする波は、時節
をいつごも定めぬ雪であるこの意。磯觸ごは岩に
くだくる波の有様をいひ、轉じて荒波のことをいふ
風よする云々の大意風に浪のよりくる磯には、驚
も知らぬ花（波を花と見立つ）がさいてゐるごな

り舟のをさしげる翁ごは貫之自ら也。立つ波の歌
の大意は、波がいふ體にて、波は風をよんで波を
くだかせ雪か花かご人をまごはせんごするのであ
るの意。えあらでごはたまりかねて也。

（第二十八日）

十九日、日あしければ舟いださず。

新釋、日あしければごは、天氣具合悪き故に也。凶
日なればさいふにあらず。

（第二十九日）

二十日、昨日のやうなれば、舟いださず。皆人々うれ
へなげく。苦しくごもごなければ、たゞ日の經ぬ

る數を、今日いくか、二十日三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいもねず。二十日の夜月の出にけり。山の端もなくて、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見てや、むかし安部の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて、歸りきたる時に、舟に乗るべき所にて、かの國人、馬のはなむけし、別をしみて、かしこのからうた作りなごしける。あかずやありけん。二十日の夜の月出るまでぞありける。その月は、海よりぞいでける。これを見て、仲麿のぬし、わが國には、かゝる歌なん、神代より神もよびたび、今は上中下の人も、かやうに別をしみ、よろ

こびもあり、かなしびもある時にはよむごて、よめりける歌。

青海原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山にいでしつきかも

ごぞよめりける。かの國の人、聞知るまじくおぼえたれごも、こここの心を、おここ文字に、さまを書きいだして、この詞傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞得たりけん。いご思ひの外になんめでける。もろこしご、この國ごは、こここなるものなれご、月の影は同じここなるべければ、人の心も同じここにやあらん。さて今そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌

都にて山の端に見し月なれご

新釋、およびもそのなはれぬべしごは、餘り日數ば

かり考へてある故小指が傷ふならんご也。いごわ
びしは異本には夜はいもねず（寢入られず也）い
ごわびしごあり。山の端もなくてとは大海の中故
月は海より出で山よりのほらず。安部仲麿ごは寶
龜元年に生れ、天曆五年に死せる學者にして、靈
龜二年八月二十二日遣唐使として唐に留學し、遂
に彼地に仕へて彼地に死す。或は歸路船中に没せ
りごいふ。李白が仲麿を哭する詩に、日本晁卿辭

帝都。征帆一片繞蓬壺。明月不歸沈碧海。白雲秋
色滿蒼梧ごあり。舟にのるべき所ごは明州の海邊
なりごいふ。彼國人云々唐人別れを惜みて詩を賦
す。王維が作は、積水不可極。安知滄海東。九州
何處遠。万里若乘空。向國歸看日。歸帆但信風。
鰲身映天黑。魚眼射波紅。郷國扶桑外。主人孤島
中。別離方異域。音信若爲通。ごいふ。此外色
々あり。神代より云々和歌の道は神代より起る。
神も已に讀みたまへり。よみたびは讀み給ふ也。
青海原云々の歌は、青々たる海上を眺むれば、は
るかに東天に月出でたり。これや故郷にて見なれ

たる大和奈良春日なる三笠山に出てたる月ならん
 となり。青海原は正しくは天の原なり。海上にて
 の詠なれば青海原をかへたる也。ふりさげ見るこ
 はふりは助辭、さけは遙かなる事。をいふ文字と
 は漢字なり。假名を女文字といふによれり。歌の
 意味を漢文に直せる也。この詞傳へたる人とは
 通辨人をさす。さて今そのかみを云々とは貫之仲
 麿の事を思ひいたして也。ある人は貫之也。

(第三十日)

二十一日、卯の時ばかりに舟出す。みな人々の舟いつ
 これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうに

ぞありける。おぼろげの願ひによりてにやあらん。風も
 ふかす。よき日いできてこぎゆく。このあひだに、つ
 かはれんとて、つきてくる童あり、それがうたふ歌。

猶こそ國の方は見やられる

吾父母ありとし思へばかへらや

さうたふぞあはれはる。かく謠ふを聞きつゝ漕ぎくる
 に、くる鳥といふ鳥、いはほの上に集りをりその巖の
 もとに、浪白くうちよす。梶取のいふやう、黒き鳥の
 もとに、白き浪よすぞいふ。このことは、何こには
 なけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程に法あ
 はねば咎むるなり。かくいひつゝゆくに、舟君なる人

浪を見て、國よりはじめて、海賊むくいせんといふなる事を思ふ上に、海のまたおそろしければ、頭も皆しらぬ。七十八十は、海にあるものなり。

わが髪の雪こいぞべのしら浪こ

いづれまされりおきつ島守

かぢこりいへ。

新釋、卯の時とは今の午前六時也。

おほろげの願こ

は容易ならざる大願のごと。童こは貫之が女兒の

お伽して土佐より來れる女兒なるべし。猶こそ云

々の歌の大意は、皆舟中の人々は都の方ばかり見

ざるれごも自分は父母の居る國の方がなつかしい

この意。くる鳥こは黒色の水鳥也。何こにはなけ

れごも云々此の言葉は何の意味なき事ながらた

何こなく風流めきて聞ゆる也。舟君こは貫之也。

海賊むくいせんとは貫之土佐守たりし時屢海賊を

追捕せり。其の怨を以て海賊等は貫之が歸京の途

に要撃せんとする也。海賊の大將は前伊豫椽藤原

純友なり。頭もみなしらぬこは養生經に魚勞則

尾赤、人勞則髮白こあり。楫取いへこは島守こ呼

ひかけたるも元より舟中の事故、島守の居るべき

筈なし。故に楫取を呼びかけたる也。

(第三十一日)

二十二日、よへのごまりより、ここ泊をおひてぞゆくはるかに山見ゆ、年九つばかりなる男の童、年よりはをさなくぞある、この童、舟をこぐまにく、山も行くぞ見ゆるを見て、あやしき事ぞ、歌をぞよめる、そのうた。

漕ぎてゆく舟にし見れば足引の

山さゆくを松はしらすや

こぞいへる。おさなき童の事にては似つかはし。けふ海あらけ、磯にゆきふり、浪の花さけり、ある人のよめる。

波このみひこへに聞けぞ色見れば

雪こ花こにまがひぬるかな

新釋、よへのごまりは海中に碇泊せる也。此邊は阿波なるべし漕ぎて行く歌の大意は、かく漕ぎ行く船中より見れば、山も動くやうに見ゆるが、其上に立つ松はそれを知らないのであらうか。足引は山の枕辭。海あらけは波立つなり。波このみの歌の大意は、音をきけば波であるが、色を見れば雪だか花だか分らぬこなり。

(第三十二日)

二十三日、日照りて曇りぬ。このわたり、海賊おそりありこいへば、神佛を祈る。

新釋、おそりは怖れ也。

(第三十三日)

二十四日、昨日のおなじ所なり。

新釋、二十一日より海上に碇泊しつゝあり。

(第三十四日)

二十五日、櫂とりらの、きた風あしといへば、舟いださず、海賊追ひくといふ事、たえずきこゆ。

新釋、追ひくは追ひ來るなり。此の警報は陸上より傳ゆるなるへし。

(第三十五日)

二十六日、まことこにやあらん、海賊追ふといへば、夜

なかばかりより、舟を出してこぎ來る道に、たむけする所あり、櫂取して、幣たいまつらするに、ぬさのひんがしへ散れば、かぢごりの申したいまつる事は、この幣のちる方に、御舟すみやかに、漕がしめたまへご申してたいまつる。これを聞きて、ある童のよめる。

わたつみのちぶりの神に手向する

幣の追風やますふかなん

とぞよめる。此のあひだに、風のよければ、かぢごりいたくほこりて、舟に帆かけなごよろこぶ。その音をきいて、童も女も、いつしかと思へばにやあらん。いたくよろこぶ。この中に、淡路のたふめといふ人のよ

める歌

追風のふきぬる時はゆく舟の

ほでうちてこそ嬉しかりけれ

とぞ、ていけの事につけつゝ祈る。

新釋、たむけする所は神に物を捧げて海路の平安を祈る所なり。ぬさは禱布佐にて祈禱する時初に奉る麻也。ひんがしはひむかしにて東方の意。わたつみの云々歌の大意は、海上の道祖神に奉れるぬさを東方を吹きつけた風がやまずに吹き京へ送れとなり。この歌は貫之が作なるべし。たうめは老女の事也。追風の云々大意は順風に帆をあげ

て行く時は、帆手即ち帆綱を叩いてよろこぶとなり。ていけは前に註せるてけの事也。

(第三十六日)

二十七日、風ふき浪あらければ、舟いださず。これかれかしこくなげく。男たちの心なくさめに、からうたに、日をのぞめば、都さほしなご、いふなる事のさまをきゝて、ある女のよめる歌。

日をだにも天雲近く見るものを

都へさおもふ道のはるけさ

又ある人のよめる、

吹風のたえぬかぎりし立くれば

波路はいご、遙けかりけり

日ひと日風やまず、つまはじきをしてねぬ。
新釋、かしこくなげくは非常に嘆息するの意。日

を望めばは事故あり。晋書に、明帝數歲、元帝抱置膝前、偶、長安使來、因問、汝謂日與長安孰遠對曰、長安近、不聞人從日邊來、居然可知也。元帝異之、明日宴群僚、又問之、對曰、日近、元帝失色曰、何仍異問者之言、對曰、舉目則見日、不見長安、由是益奇之。吹く風の歌は、海上に吹く風はやまぬ限りは波もやまぬ故波路は遠きが上にも遠しとなり。表面は波の事をいへるものなれど

も、都の遙にして容易に歸り難きをいふなり。つまはじき云々は彈指にて物をいみてする也。

(第三十七日)

二十八日、よもすがら雨やまず。けさも。

(第三十八日)

二十九日、舟出してゆくに、日うらくと照りてこぎゆく瓜いと長くなりたるを見て、日を數ふれば、今日の子日なりければきらず。む月なれば、京の子の日の事いひいで、小松もかなこいへご、海なかなればかたしかし。ある女のかきて出せる歌、
おほつかな今日は子の日か蟹ならば

海松をだに引ましものを

とぞいへる。海にて子の日の歌にては、いかゞあらん
ある人のよめる歌、

今日なれど若菜も摘まず春日野の

わが漕ぎ渡る浦になければ

かくいひつゝ漕ぎゆく。おもしろき所に舟をよせて、
こゝやいづこさいひければ、土佐の泊こぞいひける。

昔土佐さいひける所に住みける女、この舟にまじりけ
り。それがいひけらく、昔しばしありし所の、名たぐ
ひにぞあなる。あはれさいひてよめる歌、

年ごろを住みし所の名にしおへば

きよる涙をぞ哀こぞ見る

新釋、爪をきるには日を撰ぶこゝ昔よりの習慣也。丑

の日は手の爪、寅には足の爪をきるを吉日とす。

子の日にきるはあしきにあらねど、明日の丑の日
を待たんとする也。京の子の日は當時初子の日
に野邊にて小松を曳きぬきて千代を祝ふ。之を小
松引といふ。今は舟中なればそれも叶はずとなり
おぼつかなの歌の大意は、今日は子の日なれば海
邊に居らばせめて海松（みるこいふ海草なり）に
ても、曳かんものをと残念がる也。今日なればの
歌の大意は、今日は子の日なれども吾が漕ぎ行く浦

には春日野がないから若菜もつまぬとなり。春日野とは若菜の名所にて、此所にてはたゞ野といひて然るべき所也。土佐の泊とは島なり。貫之が船を入れたるは東か南かなり。昔土佐といひける云々之れは貫之自身をさすなり。名たぐひとは名の類也。似たる也。年頃の歌の大意は、數年間住みたる所の名と同じき故、寄せてくる波もなつかしく思ふとなり。

(第三十九日)

三十日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞き、夜なかばかりに舟をいだして、阿波のみこをわた

る。夜なかなれば、西東も見えず。をとこ女、からく神佛を祈りて、このみこを渡りぬ。寅卯の時ばかりに奴島といふ所を過ぎて、田無川といふ所をわたる。からくいそぎて、和泉の灘といふ處にいたりぬ。けふ海に浪に似たるものなし。神佛の恵かうおれるに似たり今日、舟に乗りし日より數ふれば、三十日あまり九日になりけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

新釋、夜ありきせざなりは夜行せずの意。みととは港又は瀬戸にして、此所にては阿波の鳴戸也。からくは辛うじて也。寅の時は今日の午前四時、卯

は六時なり。奴島とは治島又は野島といふ、淡路海中にある島なり。田無川は田川のこゝ也。今は和泉の國に云々始め和泉まで平かに願ひて旅たり。然るに三十九日を経て辛うじて和泉に入る今は海賊も物の數ならず云々安心せる也。

(第四十日)

二月朔日、朝の間雨ふり、午の時ばかりにやみぬれば和泉の灘といふ處より出でこぎ行く。海の上昨日のごとくに、風浪見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、貝の色は蘇芳にて、五色に、今一色ぞたらぬ。このあひ

だに、今日ははこの浦といふ處より、綱手曳きてゆくかくゆくあひだに、ある人のよめる歌、

玉くしげはこの浦浪たゝぬ日は

うみを鏡とたれか見ざらん

またふな君のいはく、この月までなりぬるこゝてなげきて、苦しきにたへずして、人もいふこゝこゝて、心やりにいへる歌、

行舟の綱手の長き春の日を

四十日五十日まで我は經にけり

さく人の思へるやう、なぞたゞこゝなるこゝ、ひそかにいふべし。ふな君の、からくひねり出して、ふと思へ

る事を、えしもこそしひへきて、さゝめきてやみぬ。
にはかに風浪たかゆれば、こゝまりぬ。

新釋、黒崎の松原は日根郡淡輪村にあり。はこの浦
は日根郡箱作村にあり。綱手は船にかけて引く
綱なり。玉くしげの歌の大意は、箱の浦に浪立た
ぬ日は平かなる故誰も海を鏡に見誤るとなり。玉
くしげは箱の枕辭なり。この月まで云々一月中に
歸京し得むと思ひしに案外にも故障多く二月の中
に入りたるをなげくなり。行舟の云々歌の大意は
永き春の日を四五十日も費せしこなり。行舟の綱
手のは長きの序句。一本にひく舟に作る。なぞた

いことなるこはごうしてこんなつまらぬ歌なるや
こ也。からくひねり出してこは、苦心して詠せし
こ也。しひねこは誣ゆるなかれなり。

(第四十一日)

二日、浪風やまず。日ひこ日、夜もすがら、神佛に祈
る。

(第四十二日)

三日、海の上、昨日のやうなれば、舟いださず。風の
吹くここやまねば、岸の浪たちかへる。これにつけて
よめる歌、

緒をよりてかひなき物は落積もる

涙の玉をぬかぬなりけり

かくて今日は暮れぬ。

新釋、岸の浪たちがへるとは浪のさかまき立つをいふ。業平の歌に「いこしく過行く方の戀しきに羨しくもかへる浪かな」とあり。緒をよりに云々緒をよりたりとて何日都へ歸り得べしとも覺えずと悲しむなり。浪のたちがへるを見て羨ましく思へる心持もあるへし。緒をよることは、舟中徒然のあまりする戯なるべし。

(第四十三日)

四日、かぢごり、けふ風雲のけしき、はなはだあしこ

いひて、舟出さずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風たゞず。この襪取は、日もえはからぬかたるなりけり。この泊の濱には、くさぐさのうるはしき貝石なご多かり。かゝれば只昔の人をのみ戀ひつゝ、舟なる人のよめる。

・ 寄する浪うちも寄せなん吾戀ふる

人わすれ貝おりて拾はん

こいへれば、ある人のたへずして、舟の心やりによめる、

忘貝拾ひしもせじしら玉を

戀ふるをだにも形見とおもはん

こなんいへる、女兒のためには親をさなくなりぬべし
玉ならずもありけんをこ、人いはんや。されども、死
にし子かほよかりきといふやうもあり。猶同し所に日
を経る事をなげきて、ある女のよめる歌

手かひで、寒さも知らぬ泉にぞ

斟こはなしに日頃經にける

新釋、この楫取は云々天氣豫報が當らず上天氣を空
しく碇泊せしめられしより怒つて言ふ也。昔の人
こは死兒の事なり。寄する浪の歌の大意は、寄す
る浪よ願はくは忘貝を打寄せてくれ。然らば舟か
らおりて拾ひ亡兒のこころを忘れやうと也。母親の

歌なるべし。あゝ人こは貫之也。たへずしてこは
母親の悲嘆に同感して也。わすれ貝云々歌の大意
は、忘貝がより來こも拾ひますまい。亡兒を思ふ
と心をせめてもの形見こせんとなり。女兒のため
には云々兒の爲めには親も小兒のこころく分別なく
なりて悲しむと也。玉ならず云々斯く白玉なぞこ
たこへたれば人或は玉の如くはあらざりしこ笑ふ
も知れねど、死んだ兒は美貌なりこのたこへもあ
る故、あながち無理にもあらざるべしと也。手を
ひで、云々一首の大意は、手をつけてゐても寒く
ない泉に何事もせず日を送つてゐる、即ち時候

のよい和泉の國に茫然として暮してゐることなり。
此の土佐日記の一卷を貫くは、亡兒を追慕するの
情なり、この悲みを述べんが爲めに、斯く女文字
の日記を書けるものにして、もし愛兒逝去といふ
ことなかりせば、千古の名文章は生れずして終り
しならむ。

(第四十四日)

五日、今日からくして、和泉の灘より、小津の泊をお
ふ。松原めもはるくなり。かれこれ苦しければよめ
る歌。

行けごなほ行きやられぬは妹がうむ

をづの浦なる岸の松原

かくいひつゝくるほごに、舟ごくこげ、日のよきにこ
もよほせは、楫取、舟子ごもにいほく、御舟よりおほ
せたぶなりあさぎたのいでこぬさきに綱手はや曳けと
いふ。このことばの歌のやうなるは、かぢごりのおの
づからの詞なり。かぢごりはうつたへに、われ歌のや
うなる事いふにもあらず。聞く人の、あやしく歌めき
てもいへるかなごて、かきいだせれば、げに三十文字
あまりなりけり。今日浪なたちそご、人々ひねもすに
いのるしるしありて、風波たゝず。今しかもめむれぬ
て、あそぶところあり。京のちかづくよろこびのあま

りに、あるわらはのよめる。

祈りくる風間と思ふをあやなくも

鷗さへだに浪に見ゆらん

といひてゆくあひだに、石津といふところの松原おもしろくて、濱べこほし。また住吉のわたりを漕ぎ行くあるひこのよめる、

今見てぞ身をば知ぬる住の江の

松よりさきに吾は經にけり

こゝにむかしつ人の母ひこ日片時も忘れねばよめる。
住の江の舟さしよせて忘草

しるしありやご摘みて行くべく

ごなん、うつたへに忘れなんごにはあらで、戀しき心地しばしやすめて、又も戀ふる力にせんごなるべし。かくいひて、ながめつゝ來る間に、ゆくりなく風ふきて、こげごもこげごも、しりへしぞきにしぞきて、ほごくしくうちはめつべし。楫取のいはく、かの住吉の明神は、れいの神ぞかし、ほしき物ぞおわすらん。ごは今めくものか。さて幣たいまつり給へご、いふにしがひて、幣たいまつる。かくたいまつれごも、もはや風やまで、いやふきに、いやたちに、風浪のあやふければ、楫取またいはく、幣には御心のゆかねばや御舟もゆかねなり、猶うれしと思ひたぶべき物、たい

まつりたまへといふ。又いふにしたがひて、いかゞは
せんさて、まなこもこそ二つあれ。たゞ一つある鏡を
たいまつるとて、海にうちはめつれば、くちをし、さ
ればうちつけに、海は鏡のごこなりぬれば、ある人の
よめる歌、

千早振神の心のある、海に

かゞみをいれてかつ見つるかな

いたく住の江のわすれ草、岸の姫松なごいふ神にはあ
らずかし。めもうつらゝ鏡に神の心をこそ見つれ。
かぢごりの心は、神の御心なりけり。

新釋、小津は和泉郡にあり。行けご云々歌の大意、

行けごゝつきぬは小津の浦の松原なりと也。妹
がうむはをの冠詞也。あさぎたとは朝吹く風也。
御舟より云々楫取は舟君の命令をその儘舟子に傳
へたる也、されご其言裡に今に風吹き出づるも知
らぬなりと冷笑するさまあり。うつたへは一向に
なり。祈りぐる云々の大意、風波なかれと祈りつ
ゝあるものから、鷗を見てさへ波と疑はれる。鷗
さへだには異本に鷗さへだゝとあり。さへごだに
ごは元來多少の差あり。即ちさへは多き意にて其
の上に、添えて也。だには少き意にてなりごも也
されご二者は當時已に混同され同一のものとなり

居れり。石津は大島郡にあり。松の名所なり。今見てぞ云々の大意、貫之住の江の松を見て、松は昔の如く常磐のみごりこきに自分は白髪となつたご老をなげく也。むかいつ人のつはのなり。亡兒の事。住の江云々の大意、住江に忘草といふものあるが果して効能ありや否摘んでみたい也。忘草は萱草なり。詩經に諷草食之令人忘憂とあり。こげごもく、異本にはたけごもくごあり。いぞきとはしりぞきの略言。ほごく、いご云々殆ど海中に陥らんとする也。れいの神とは靈驗ある神にして物ほしくなれば風波を起す神なり。今めくと

は今様めくにて慾深きことをいふ。もはらごは一
向に也。幣には御心も云々幣だけの供物にては餘
り輕少なりとて神の受納し給はぬ也。まなごも云
々眼は大切なるものなれごも二ツあり。鏡はたご
一つこそなし。うちはめ云々投げ入れる也。うち
つけは聽てなり。ちはやぶる云々荒れたる神の心
をなだめんご鏡を海に入れてためしみごなりい
たくは著しく也。住の江の云々輕々しく見るべき
神にあらずごなり。目もうつらご云々眼前神徳
の驗著なるを見たりごいふ意。楫取の心は云々楫
取の言へる如く風浪おさまりたる故かくいふ也。

(第四十五日)

六日、みをつくしのもとより出て、灘波の津をきて、河尻にいる。みな人々をんなをさなきもの、ひたひに手をあて、よろこぶこごふたつなし。かのふな系ひの島のおほい子、都近くなりぬこいふをよろこびて、船底より、頭をもたげさせて、かくぞいへる、

いつしかこいぶせかりつる灘波瀉

蘆漕そけて御舟來にけり

いご思ひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これがなかに、こゝちなやむ舟君ぞ、いたくめで、舟酔したまひしみかほには、似ずもあるかなこいひける

新釋、みをつくしは瀦の淺深を示す標木也。河尻

とは河口也。ひたひに手をあて云々元來光明をさくる仕草なりしが後に喜悅の情をあらはすものとなれり。印度より舶來の禮式なり。おほい子は人名なるか又は唯大の字をつけたるのみなるか不明なり。創見には紀貫之に仕へたる老女にて、些か愚なる女なりしが如しこいへり。如何にや。かいらをもたげさせて異本にはかしらをもたげてこあり。いつしかこの歌の大意は、何日かくこ待つてゐた灘波灣に着いたとなり、蘆漕そけてこは蘆をさけて也。いご思ひの外なる云々案外なる人

の歌をきくものかなと驚く也、これがなかに云々
其人々の内にて同じく舟酔に苦んで居た貫之が聞
いてほむるなり。御顔とは戯れて尊敬せる也。

(第四十六日)

七日、今日は川尻に、舟入りたちて漕ぎのほるに、川
の水ひて、なやみわづらふ。舟のほる事いさかたし
かゝるあひだに、舟君のやまうご、もこよりこちく
しき人にて、かうやうの事、更にしらざりけり。かゝ
れども、淡路のたうめの歌にめで、みやこほこりに
もやあらん。辛くして、あやしき歌ひねりいだせり。
そのうた、

きこきては川のほり江の水を淺み

舟も吾身もなづむ今日哉

これはやまひをすればよめるなるべし。ひこ歌に、こ
とのあかねば、今ひとつ、

こくと思ふ舟なやますはわがために

水の心の淺きなりけり

(この歌は、都近くなりぬるよろこびにたへずして、
いへるなるべし)。淡路のこの歌に劣れり。ねたくいは
ざらましものをと、くやしがるうちに、入りてねたけ
り。

新釋、やまうごは病人なり。こちく、いさかたは武

骨一遍のこと。みやこぼりこは都の近くなりし
 を喜び誇る也。きこきては云々歌の大意は、來ら
 れるだけ來たが今日は堀江川の水が淺くて進むこ
 ころが出来ぬ也。きこきてはこは來るつもりで來
 た也。川のほり江こは堀江川なり。水をあさみの
 をは感動詞、即ち水あさき故に也。ひこ歌にこと
 のあかねばこは一首の歌だけにては思ふやうに言
 ひつくせぬ故にこなり。こくこ思ふ云々一首の大
 意は、早く都へ行きたいと思ふに川水淺くして舟
 進まぬは、川水が吾々に不親切なのである。この
 歌は………いへるなるへしまでは古

寫本になし。恐くは傍書を本文に誤入せるならん
 淡路のここは淡路の御こかく。女を尊敬して呼ぶ
 也。入りてねにけりは異本に夜に成てねにけりこ
 あり。

(第四十七日)

八日、なほ川のほりになづみて、鳥養の御牧こいふほ
 ころにこまる。舟君れいの病おこりて、いたくなや
 む。ある人いさゝかなる物もてきたり。米してかへり
 ごとす。男ごもひそかにいふなり。いひほしてもてる
 ことや。かうやうの事、こころぐにあり。今日せちみ
 すれば魚もちひず。

新釋、鳥養の御牧は攝津島下郡に在り。昔の牧場なり。例の病は老衰病なり。いひぼしてもつるこやこあり。其こやは異本にはいひぼしてもつるこやこあり。其意は魚を貰へる返禮に米をやりし故、飯粒にて魚を釣たやうなものだこいふ洒落なり。今日節忌云々今日は八日の齊日故魚を貰つたが食べぬこなり
(第四十八日)

九日、こゝろもこなきに、あけぬから、舟をひきつゝのぼれども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざるこのあひだに、和田の泊の、あがれの所こいふ所あり米魚なごこへばおくりつ。かくて舟ひきのぼるに、な

ぎざの院こいふ所を見つゝゆく。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡にも、松の木ごもあり。中の庭には梅の花さけり。こゝに人々のいはく、これ昔名高くきこえたる所なり。

惟喬のみこの御ごもにて、故在原業平の中將の、世の中にたえてさくらの咲かざらば

春の心はのごけからまし
こいふ歌よめる所なりけり。今きようある人、所に似たる歌よめり。

千代經たる松にはあれご古への
聲のさむさは變らざりけり

またある人のよめる

君こひて世をふる宿の梅の花

むかしの香にぞなほ匂ひける

こいひつゝぞ、都へ近づくを、よるこびつゝのぼる。かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、みな子ごもなかりき。いたれりし國にてぞ、子生めるものごもありあへる。みな人、舟のとまる處に、子をいだきつゝおりのぼりす。これを見て、むかしの子の母、かなしきにたへずして、

なかりしも有つゝ歸る人の子を

有しもなくて來るが悲しき、

といひてぞなげきける。父もこれをきゝていかゞあらん。かうやうの事、歌好むごてあるにもあらざるべし。もろこしもこゝも、思ふここにたへぬ時のわざごか。こよひ宇土野といふ所にこまる、

新釋、あけぬからこは夜明けぬ内になり。あがれこは追分の驛をさす、米魚なごこへはおくりつごあるは誤記なるべしといふ。故に米をやりて魚を覓めたるにあらずやこも言ふ説あり。さるは前來の筆法を見れば米に不足するこは解し難き故なり。渚の院こは河内國交野郡にあり。文徳天皇の離宮なりしを、後に第一の皇子惟喬親王に賜へり。今

日の渚の岡のあたりにありしなるべし。惟喬親王の事。伊勢物語に詳し。世の中への歌意味明瞭なり。但さくらのさかさらばさあるはなかりせばの誤記なり。さころに似たるは場所に適合せるなり千代へたる云々歌の大意は、千年万年たつた松の木だが矢張其松風の音はさむしとなり。君こひて云々の歌は惟喬親王を慕ひて咲く梅の花は數十年を経たが昔こ同しく匂つてゐるこなり。いたれりい國こは土佐なり。むかしの兒の母こは貫之の妻なり。なかりしも云々の歌の大意、行く時子供がなかつた屬官等が今歸る時には子供をつれてゐる

其等の他人の子供を見るにつけ、行く時あつた貫之が歸るにないのがかなしいこ也。宇土野は淀川の西にあり。

(第四十九日)

十日、さはる事ありてのぼらず。

(第五十日)

十一日、雨いさゝかふりてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山のよこをれるを見て、人にこへば、八幡の宮こいふ。これをきゝてよろこびて、人々拜みたてまつる。山崎の橋見ゆ。うれしき事限なし。こゝに相應寺のほこりに、しばし舟をこめて、こかく定む

る事あり。この寺の岸のほとりに、柳おほくあり。ある人この柳川の底にうつれるを見てよめる歌、

さぐれ波よする綾をば青柳の

かげの糸して織るかごぞ見る

新釋、さしのぼるは棹にて舟をやる也。よこをれる

さは横はれる也。八幡の宮とは男山石清水八幡宮

なり。山崎の橋とは當時三大橋の一にして、聖武

天皇の神龜三年行基菩薩の作れる所也、山城乙訓

郡に在り。相應寺とは山崎の橋際に在り權僧正壹

演の開基せる所なり。さだむるは相談する也。さ

ぐれ波云々歌の大意は、小波のさらくと紋をつ

くはば青柳の糸のすることなるべしとなり。

(第五十一日)

十二日、山崎にとまれり。

(第五十二日)

十三日、なほ山崎に、

(第五十三日)

十四日、雨ふる。けふ、車みやこへとりにやる。

(第五十四日)

十五日、けふ、車ゐてきたり。舟のむづかしさに、舟より人の家にうつる。この人の家よるこべるやうにてあるじしたり。この主人の、又あるじのよきを見るに

うたておもほゆ。いろくにかへりごさす。家の人の
いでいり、にくげならず。あや、かなり。

新釋、舟のむづかしさは舟の窮窟にてむさくるし
きなり。このあるじは主人の事。したのありじ
こは饗應のこさなり。うたては意外なり。いでい
りとは出入起座也。あやは禮儀なり。起座進退禮
に叶へるなり。

(第五十五日)

十六日、今日の夕つかた、京へのぼるついでに見れば
山崎のたなたる小櫃の繪も、まがりのほらのかたも變
らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬこそいふなる。か

くて京へゆくに、高坂にて、人あるじしたり。かなら
ずしもあるまじきわざなり。たちてゆきし時よりは、
來る時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもか
へりごさす。夜になじて、京に入らんと思へば、いそ
きしもせぬほごに、月いでぬ。かつら川月のあかきに
ぞ、わたる人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらね
ば、淵瀬さらに變らざりげりこいひて、ある人のよめ
る歌、

ひさかたの月におひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

またある人のいへる、

あまぐものはるかなりつる桂川

袖をひでゝも渡りぬるかな

またある人のよめる、

桂川わが心にもかよはねご

おなじふかさにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおほかる。夜ふけてくれば、ところくも見えす。京にいたりたちてうれし、家にいたりて門にいるに、月あかければ、いさよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家をあづけたりつる人の、心もあれたるなりけり。中垣こそあれ。一つ家のやうな

れば、のそみてあづかれるなり。さればたよりごごに物もたえずえさせたる、ごよひかゝる事ご、こわだかにもものもいはせず。いごはつらく見ゆれご、心さじはせんごす。さて池めいて、くぼまり水づける所あり。ほごりに松もありき。五年六年のうち、千年やすぎにけん。かた枝はなくなりけり。今生ひたるごまじれる。大方みなあれにたれご、あはれごぞ人々いふ。思ひいでぬ事なくごひしきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかゞはかなしき。舟人もみな子いたゞきてのゝしる。かゝるうちに、なほかなしみにたへずして、ひそかに心知れる人ご、い

へりける歌、

うまれしも歸らぬ物をわが宿に

小松のあるを見るが悲しさ

ごぞいへる。なほあかずやあらん。またなん、

見し人を松の千年に見ましかば

遠く悲しきわかれせましや

忘れがたくくちおしきこおほかれご、えつくさず、

ごまれかくまれ、ごくやりてん。

新釋、山崎のたなごは店也。小櫃の繪ごは小さき箱

に繪を書きたるものにて小兒の玩具なり。まがり

のほらのかたごはまがり餅なり。米、麥の粉を飴

にてこね油に揚げたるものなりごいふ。其餅を法螺貝の形に作れる也。かならずしも云々饗應なごすべき關係の人にあらざるに諂ひてする也。島坂は山城乙訓郡石塔寺の南にあり。飛鳥川は大和にり。川底淺く雨降るたびに流水を異にすごいひて昔より定めなき例に用ゐ、昨日の淵は今日の瀬となるごなぞいへり。此所には桂川が昔見しご異ならざる由をのへむごて例に用ひたり。ひさかたの云々其大意は、天上の月中に生ぜる桂の如く地上の桂川も其形を變ぜずごなり。天雲の云々の大意は、土佐にありし頃は天雲の遠くにありし如く思

へる桂川を今日は渡ると也。桂川云々の大意は、桂川の深さこ、吾が都に近づける喜悅の情の深さこ、同一なりこの意。へらはべくにして、へらなりはべく見ゆる也。家に至りてこは貫之の邸につける也。貫之は富小路の東の隅にありき。中垣こそあれ云々中垣こは隣家この境界の塀なり。此の中垣はあるも隣同士の一つ家のやうなればこて自ら進んで留守番をせしこなり。こわだかにもものもいはせずこは貫之が従者を戒めて悪口せしめさりしなり。いこはつらくこは隣人の不親切に腹立てこも也。池めいづくぼまり水づける所こは、昔は

池なりしが手入せざりし故、草生じ底埋れて氷たまりの如く見ゆこ也。うまれいしも云々の大意、此家にて生まれしものも歸らぬに、留守の間に小松の生へてゐるのを見るがかなしいこ也。見し人をの歌の大意、死せる女兒をして松の如く千歳の齡を保たしむるを得ば斯く死別の悲みをせざりしならんこの意。女兒は土佐に葬りし也。忘れがたく云々此の日記に記せる事以外にいろく書きたいここは多けけれこ、今はやめにしておく。こくや、りてんこは破りすてむ也。謙遜の語なり。

土佐日記新釋終

明治四十二年八月十四日印刷
明治四十二年八月卅日發行

不許複製
土佐日記新釋

定價金廿五錢

著者 田山 停雲

發行者 大阪市南區安堂寺四丁目百九番屋敷 井上 尙一

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目四十番屋敷 井上 鐵次郎

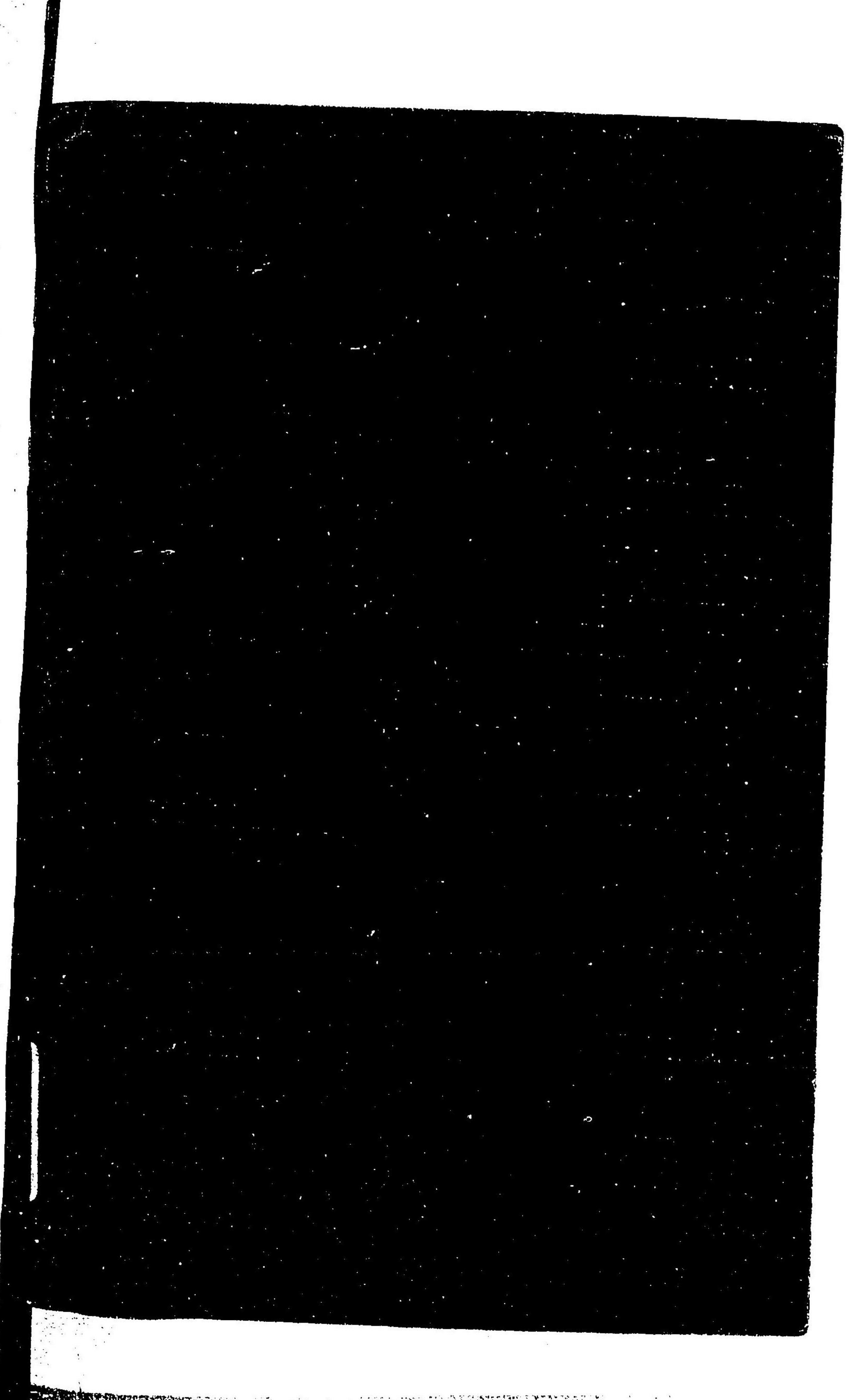
印刷者 大阪市西區本田町一丁目四十七番地 日ノ出民助

發行所 東京 井上一書堂
大阪

振替貯金口座大阪三四九四番

259

544



土佐日記新

259
544

特

095865-000-4

特22-183

土佐日記新釈

田山 停雲 / 著

M42

DBR-0077

